

DALS ニュースレター No.2

死生学

東京大学
21世紀COEプログラム

生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築
Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life

2003年6月1日

目次

どのような研究会議を行うのか？

島園進

ワークショップ・シンポジウム案内

ワークショップ「仏教における死生観」

末木文美士

シンポジウム「死生学と応用倫理」

島園進・竹内整一

シンポジウム「関東大震災と記録映画～都市の死と再生」

木下直之

シンポジウム「死生観と心理学」

横澤一彦

シンポジウム「死者と生者の共同性」

関根清三

シンポジウム「洋の東西の美術と思想にみられる死後の世界観」報告

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>



どのような研究会議を行うのか？

島 蘭 進

21世紀COEプログラムによる個々の研究プロジェクトは、大きな予算がつき、たくさんの研究者が共同でことにあたる事業である。ふだんはなかなかやれない大規模な研究会議やシンポジウムを企画することになるのは成り行き上、必然のようにも思われる。

だが、このような機会を与えられた時こそ、研究会議やシンポジウムにおいて何が達成されるのか、どのような集まりの形態が追求する目標にふさわしいものなのか、十分に検討、考察すべきだろう。

「死生学の構築」の研究プロジェクトでは、スタートダッシュ期ともいえるべき2002年度から2003年度にかけて、さまざまなタイプの研究会議やシンポジウムの開催を計画してきた。この「DAL Sニュースレター」第2号では、比較的規模の大きな研究会議やシンポジウムについて、すでに行われた会議の状況を紹介し、今後2003年中に開かれるものの主旨や概要を掲載する。

とりあえず、このプロジェクトではいくつかの研究会議の形態を区別している。「公開シンポジウム」は壇上に数人が乗ってやりとりをし、たくさんの聴衆がそれに耳を傾け、短時間、質疑応答という形で参加するものである。しかし、こうしたシンポジウムは不全感を残すことが多い。討議の深まりをもたらしうかどうか心許ないところがある。

お互いを理解しうる空間を保証するとすると、やや小人数の集会が望ましいこととなる。「ワークショップ」はそのような凝集した討議を追求する。この両者の中間的な形態として、「円卓研究集会(ラウンドテーブル)」も考えられよう。10数人までの少数の討議者が長時間にわたって議論を深め、周囲に数十人ほどの聴衆が囲んで時折、討議に参加する。これらは参加者が限定されるが、学問研究上の深さという点では効果が大きいだろう。実はもっと小規模の「研究会」こそ、もっとも充実したやりとりができるようにも思われ、「死生学の構築」プロジェクトでも重視しているが、これについては他の号で紹介することになる。

だが、規模の大きな研究会議ほど、これまで近づきにくかった研究者同士の出会いを含んだ多元的な「研究交流」が多くなる。「死生学の構築」は人文学と医学や生命科学の交流など、従来の学問の枠の中で、超えにくかった側面を超えていこうという野心をもっている。だが、また学際などという前に近い主題に関心をもつ研究者相互の間に実はさまざまな障壁があることも意識している。学び合うことへの情熱を研究会議の原点としたい。

いくつかの研究会議の計画を進めていくと場所と設備の問題で大いに苦労する。東大キャンパス内、とりわけ文学部・人文社会研究科内に充実した研究会議を行うにふさわしいスペースがそろっているだろうか。これまで多くの方が尽力してこられたにもかかわらず、現代のコミュニケーション環境・技術を考えると、やはりもの足りない。個々のCOEプロジェクトが追求する研究課題は限定されたものであるが、スペースや設備の問題は学部・研究科総体で考えていくべき事柄であり、全国の、また世界の大学・研究機関のスペース利用、設備利用のあり方に学びつつ充実を図っていくべき事柄である。もっとも設備が整って中身はやせ細るという可能性も考えておかななくてはならない。

2003年中に行われる「死生学の構築」の研究会議を見守りつつ、将来の研究交流のインフラ的な側面についても注意を怠らないようにしたい。



ワークショップ「仏教における死生観」

末木文美士

仏教は、もともと生・老・病・死の苦という問題から出発しており、生と死についてもっとも深く考えてきた宗教である。大まかに言えば、仏教とは生死の苦から解脱することを目的とする宗教といえることができる。しかし、広い地域と長い時代にわたって展開してきているだけに、その中にはさまざまな思想が展開し、必ずしも単純な原則論で一貫しているわけではない。

また、思想面の展開だけでなく、仏教はしばしば葬送儀礼に関与することによって、民衆の支持を得てきた。葬式仏教という日本の仏教の形態はそのもっとも典型とするところである。仏教を抽象化された思想としてだけでなく、現実に行なわれる儀礼と関連させて理解しようという傾向は、近年の仏教研究の主流となりつつある。

思想・儀礼の両面からスポットライトを当てることにより、一見すでに論じつくされているかに見える仏教の死生観は、まったく新たな相貌を見せることになるであろう。

今回のワークショップは、主として中国・日本の仏教を専門とする海外研究者を招いて開催される。提題者1名に対して、6名の討論者というやや変則的な形で行なわれるが、これはできるだけ形式化せず、自由な討論ができるようにという配慮による。

提題者であるジャクリン・ストーン氏は、日本中世の本覚思想を専門とすると同時に、近年、臨終の儀式や往生の問題に関しても研究を進めている。本覚思想においては、生死即涅槃の思想が進展し、生死の世界を超越することなく、そのまま悟りであると主張されるようになった。しかし、そのような原則論で必ずしも生死の問題が解決するわけではなく、それゆえにこそ極楽往生を求めてさまざまな儀礼が発展することになった。

思想と儀礼の両面に通じたストーン氏は、新しい研究をリードする代表的な研究者のひとりである。氏の最新の研究成果から、古代・中世の日本人の生と死に関する思索と実践が具体的に浮かび上がってくるであろう。

討論者のうち、ダニエル・スティーヴンソン氏、ポール・スワンソン氏、リンダ・ペンカワー氏は主として中国仏教を専門とし、ジャン・ノエル・ロベール氏、ポール・グローナー氏は主として日本仏教を専門としている。いずれも着実な文献研究に基づきながら、広い視野に立って新鮮な成果を発表している最前線の仏教研究者である。当該分野の7名もの第一線の海外研究者がそろうことは、なかなか得がたいことであり、活発で有益な議論が展開されることが期待される。

議論は古代・中世を中心としたものになるであろうが、それはそのまま現代における問題に直結してくる。過去と現代にまたがって展開されるスリリングな議論に期待したい。

日時： 6月4日(水) 3～6時

会場： 文学部 319 教室 (東京大学法文 1 号館 3 階)

提題者： ジャクリン・ストーン Jacqueline Stone (プリンストン大学)

討論者： ジャン・ノエル・ロベール Jean-Noel Robert (フランス高等研究院)

ポール・グローナー Paul Groner (ヴァージニア大学)

ダニエル・スティーヴンソン Daniel Stevenson (カンザス大学)

ポール・スワンソン Paul Swanson (南山大学)

リンダ・ペンカワー Linda Penkower (ピッツバーグ大学)

ルチア・ドルチェ Lucia Dolce (ロンドン大学)

司会： 末木文美士 / 下田正弘 (東京大学)



シンポジウム「死生学と応用倫理」

島 蘭 進
竹 内 整 一

このシンポジウムは21世紀COEプログラム「死生学の構築」と人文社会系研究科独自の応用倫理プログラムの共催によるもので、高まりつつある医療やケアの現場のニーズを意識し、生命倫理の問題や、死と誕生の意味への新たな問いかけなどにつき、論じ合おうというものです。

「死生学の構築」プロジェクトでは、当然のことながら「死生観」を問い直すという課題が重要な位置を占めています。これは文化的な差異や文化の歴史的变化に注目するものです。一方、「応用倫理」においては、新しい技術や生活様式に直面しつつ、文化的な差異を超えた原理を問うたり、差異を超えて合意に達するための方途を問うという課題が重要です。

シンポジウム「死生学と応用倫理」は、文化の差異や変化に着目しつつ、現場のニーズに応える知の産出を目指すもので、生命の発生と死、すなわち「いのちの始まり」と「いのちの終わり」に焦点を当てています。

第1部では、生殖技術やクローン技術や再生医療の急速な発展を踏まえ、胎児や胚や生殖細胞をめぐる生命倫理問題が論題となります。欧米ではすでに長期にわたり、人工妊娠中絶をめぐり、「いのちの始まり」についての議論がなされてきていますが、行き詰まりの様相を深めています。1978年の「試験管ベビー」の誕生以来、重みを増してきた生殖補助医療をめぐる議論は、不妊治療の普及によって次第に身近なものになり、多くの議論が積み重ねられてきています。一方、1990年代の後半になって、クローン羊ドリーの誕生やヒトES細胞の樹立がなしとげられ、人の発生過程に介入して医療の飛躍的拡充を得ようとする展望が広がってきています。こらはいずれも、生まれいずるいのちへの科学技術の介入に関わります。人のいのちの始まりをどこまで制御してよいのか、とまどいと不安が広がっており、この会議はそれらに応えるべく、新たな知の展開を図ろうとするものです。

第2部では、とりあえずは医療技術の進歩にともなって立ち現れてきた死の問題、すなわち脳死・臓器移植における死の定義の問題や、ホスピスや緩和医療などへの関心などを踏まえつつ、現代人にとっての死の意味をあらためて問おうとするものです。たとえば日本では1977年に、病院で死ぬ人と自宅で死ぬ人の割合がひっくり返って以来、現在ではほとんどの人が病院で死を迎えるようになってきています。それはかつてなかった医療技術の享受を意味すると同時に、比喩的にいえば、「畳の上で死ぬ」という、尋常な死を死ぬことのできなくなってしまった、かつてない事態の到来をも意味しています。安楽死や尊厳死が新たに問い直されるようになってきたのも、人間らしい死に方への切実な欲求と関わっていると思われれます。新しい死のあり方が避けられないなかで、私たちは古来の変わらない死のかたち・死の謎を見定める必要があります。ここでは、このような問題をすぐれて現代的問いとして総合的、多分野交流的に考えてみようと思います。

第1部「いのちの始まりと死生観」

6月6日(金) 15:00-18:00

講演会(東京大学法文2号館1番大教室)

講師: Tony Hope (Oxford University), Julian Savulescu (Oxford University)

司会: 赤林朗(医療倫理学、東京大学)

6月7日(土) 10:30-17:30

研究集会(東京大学法文2号館教官談話室)

報告者: 出口顕(文化人類学、島根大学)

荻野美穂(女性学、大阪大学)

島菌進(宗教学、東京大学)

八幡英幸(倫理学、熊本大学)

立岩真也(社会学、立命館大学)

コメンテータ: 清水哲郎(哲学、東北大学)

Hillel Levine(ユダヤ学、社会学、Boston University)

司会: Helen Hardacre(宗教学、Harvard University)

熊野純彦(倫理学、東京大学)

第2部「いのちの終わり」と死生観」

6月21日(土) 14:00~17:30 東京大学医学部大講堂

シンポジウム「新しい死のかたち・変わらない死のかたち」

パネリスト: 小松美彦(生命倫理 東京水産大)

田口ランディ(作家)

中神百合子(緩和ケア医 戸田中央総合病院)

西垣通(情報学 東京大学)

鷺田清一(臨床哲学 大阪大学)

司会: 竹内整一(倫理学 東京大学)

シンポジウム「関東大震災と記録映画～都市の死と再生」

木下直之

1923年9月1日に起こった関東大震災は東京を壊滅させたが、同時にまた江戸の名残りを一掃した。必然的に、震災からの復興は新たなデザインによる東京を出現させた。建築、美術、写真、商業デザイン、演劇、映画などの造形表現が都市文化の創造に大きく貢献し、このことは積極的に評価されてきた。しかし、そのように廃虚からよみがえり、1930年に帝都復興祭を華々しく開催した東京には、わずか15年の生命しか与えられなかった。1945年のアメリカ軍による空襲が、再び東京を破壊したからだ。大震災と大空襲はたくさんの都市住民に死をもたらした。さかのぼって、1855年の江戸を襲った安政大地震を視野に収めれば、東京の近代史とは大量死を重ねてきた歴史でもある。

シンポジウムは、関東大震災が都市に何ををもたらしたのかを、死生学の観点から解読しようとする試みである。大災害に見舞われた都市が、どのように死者に対処し、慰霊し、悲劇を克服しつつ、再生するのかを検証したい。そのために、東京の死と再生を記録した映画を手掛かりとする。第1に、記録映画が何を記録し、何を記録していないかを探るとともに、ひるがえって関東大震災が映画表現に与えた影響について考える。第2に、映画以外の視覚メディアが震災をどうとらえたかを探り、結果として、ここでもまた映画表現の独自性を明らかにする。第3は、都市に目を向け、死者を含めた災害の記憶が都市計画や建築にどのように反映したかを探る。上映映画はこれまでに未紹介のものを中心とし、映像資料から多様な情報を引き出す文化資源学の実践

の機会としたい。

日時 2003年8月30日(土) 10:30~18:00

会場 東京国立近代美術館フィルムセンター、小ホール

主催 東京大学21世紀COE「生命の文化・価値をめぐる<死生学>の構築」研究拠点
東京大学文化資源学研究室

協力 東京国立近代美術館フィルムセンター

後援 文化資源学会

構成 <第1部> 関東大震災の記録映画上映

上映映画に関する解説 = 常石史子(東京国立近代美術館フィルムセンター)

報告1「震災と都市の死」 = 成田龍一(日本女子大学)

報告2「震災と映画」 = とちぎあきら(東京国立近代美術館フィルムセンター)

報告3「震災と視覚メディア」 = 佐藤健二(東京大学)

<第2部> 帝都復興祭の記録映画上映

報告4「帝都復興祭と都市の再生」 = 原武史(明治学院大学)

報告5「死者の行方」 = 木下直之(東京大学)



シンポジウム「死生観と心理学」

横澤 一彦

本プロジェクトでは、「死生学」という新しい学問を構築しようという試みが続けられている。それは、何も無いところに新たな学問を生み出そうとしているわけではなく、人文系の様々な既存学問分野が関係しあい、融合していくことによって、少しずつ育ち、目鼻立ちが表れ、5年間のプロジェクトの中で確立されていくことが想定されている。心理学という学問分野もその一翼を担うことが期待されている。しかし、本プロジェクトに関わるものとしてその期待は感じるが、具体的な位置付けはいまだ明確ではない。

心理学は文字どおり心の学問であるが、研究対象の違いにより、様々に細分化されている。それを「なんとか心理学」という名前をつけて、分類する。認知心理学、実験心理学、神経心理学、社会心理学、発達心理学、臨床心理学など数え上げたら、きりが無い。心理学の名前のつく学会も相当な数にのぼる。実は、細分化された様々な心理学のいずれもが、心の学問である以上、死生観と無縁ではないと考えられる。しかし、今日的なテーマであるはずなのに、細分化された心理学の間で積極的に死生観を語り合う機会が多いとは言えない。このようなとき、個々の心理学の間を隔てる壁の高さをあらためて感じる。

しかし、死生観と心理学の関係を考えるとき、それは死者の学問ではなく、生命に対する学問としての心理学の立場が強調されるところに特徴があり、有機的に結びつく可能性があるように思う。すなわち、死生学を死者だけの学問にしないためにも、心理学からなんらかの貢献ができるかもしれない。

さて、日本心理学会主催で全国各地に場所を変えて毎年1回開催される大会が、本年は本プロジェクトの拠点でもある東京大学本郷キャンパスで行われる(今回が第67回大会)。この大会は、

心理学全体の中でも、発表件数や参加人数などの点で過去最大規模の大会になることが予想されている。この大会期間中に、日本心理学会と21世紀COEの共催で公開シンポジウムを開催する。基礎心理学、神経心理学、社会心理学等に造詣の深い各分野の専門家を招き、心理学に限らず広く大勢の皆さんの前で、心理学の様々な角度から死生観や生命観について語ってもらおうと考え、企画した。できれば、参加される皆さんと一緒に、死生観と心理学のそれぞれを研究する方法の多様性を実感すると共に、その接点について考える場にしたい。

期日 9月14日(日)
企画・司会 横澤一彦(東京大学)
話題提供 島蘭 進(東京大学)
金児暁嗣(大阪市立大学)
杉下守弘(東京福祉大学)
辻敬一郎(中京大学)



シンポジウム「死者と生者の共同性」

関根清三

我々は、生きている限り、自分の死を経験できない。この意味で、死は謎めいて我々の遠くにある。

しかし死は、「生の終焉」と定義されるように、生との関連においてのみ考えられる。またその死がいつ訪れるか知れないという認識は、生の根源的事実として、人の生そのものを規定している。その意味では、死は我々のすぐ近くにある。

生まれ落ちた瞬間から、遅かれ早かれ訪れる死に向かって歩み出しているのが生だとすれば、それはすでに死を含み、人に或る覚悟を強いる。

加えて、自分が愛する者の看取りや弔いがかつてなした記憶、いつかまたなすかもしれない可能性は、人の生に深い襞を与えているように思われる。

あるいは、受難や犠牲の死を遂げた死者の記憶が、生きている個人ないし社会を、根源的なところから、震撼し、あるいは支えている、そうした生の場面もある。

生と死は互いに絡みあう。

近代社会は死をタブー視し、日常生活の外へと排除しがちだったが、近年これを我々の生と表裏をなすもの、むしろ生への姿勢を規定するものとして、生との絡みにおいて見つめ直そうとする傾向が顕著である。それは、脳死や安楽死、臓器移植や妊娠中絶など、生命科学の進歩によって生死をどこまで人為的に操作できるかという、生命倫理の問題としても、主題化されるが、本シンポジウムは、むしろこれを生命科学とは切り離して、特に哲学、倫理学、あるいは宗教学、心理学などの人文学諸分野の視座から論ずることを主眼とする。

しかも特に「死者と生者の共同性」といった辺りに焦点を合わせて、死者の弔い、慰霊、鎮魂、供養、追悼、墓参といった日々の生活の中に生き続ける、死者と生者の共存のあり方について、何がしかの考察と反省を加えたい。あるいは、無念の涙を呑んで死んで行った者への記憶、その衝撃との風化しない対話、死者からの精神的な働き掛けとその社会的意義、そういった諸点へと議論を収斂させて行きたい。それが、国民国家の招魂儀礼と体制維持のための、戦没者追悼行事であったり、あるいは苛め殺した者への、苛めっ子たちの遅すぎた挽歌、また生者たちの自己慰撫や守護願望を抱いた、死者の祀り上げであったりしつつも、どこかに死者の声なき声に耳を澄

ませ、死者と共に生きようとする感受性を包含する限り、こうした死者との共同性は、我々の生を構成する重要な要素であり続けるように思われるのである。

このテーマをめぐる、古今東西の諸文明それぞれの特徴あるアプローチの仕方と、それらになお通底するもの、さらには、それらが現代の我々に問い掛けるものを、この討論の場で、問い拓いて行きたい。諸外国、諸大学からお招きした、当該分野を代表する研究者たちと、東大の諸学科の教官たちが、共に語り合い、共に知見を拓いて行く場としたいと希う。大方のご参加とご意見を仰ぎたい。

概要は以下のとおりである。

11月28日 15:30-17:15 (東京大学法文2号館1番大教室)

第1部：現代哲学はどう死を主題化してきたか(講演)

司会 松浦純(東京大学)

講演者 Günther Pöltner(ウィーン大学)

コメンテーター 関根清三(東京大学)

11月29日 10:00-18:00 (東京大学法文2号館1番大教室)

第2部：諸文明における死者と生者(シンポジウム)

司会 池澤優(東京大学)

報告者 Stephen Teiser(プリンストン大学)

宮本久雄(東京大学)

コメンテーター 関守ゲイノー(東京大学)

塩尻和子(筑波大学)

第3部：死者と生者の現在(シンポジウム)

司会 末木文美士(東京大学)

報告者 渡辺裕(東京大学)

渡辺哲夫(東京医科歯科大学)

James H Foard(アリゾナ州立大学)

コメンテーター 川村邦光(大阪大学)

沼野充義(東京大学)

Fabio Rambelli(札幌大学)

事業推進担当者

(拠点リーダー)

島 園 進 <宗教学>

(第一部会 : 死生学の実践哲学的再検討)

竹内 整一 <倫理学・世話人>

熊野 純彦 <倫理学・世話人>

松永 澄夫 <哲学>

関根 清三 <倫理学>

一ノ瀬 正樹 <哲学>

榊原 哲也 <哲学>

(第二部会 : 生と死の形象と死生観)

小佐野 重利 <美術史・世話人>

木下 直之 <文化資源学>

後藤 直 <考古学>

(第三部会 : 死生観をめぐる文明と価値観)

下田 正弘 <インド哲学・世話人>

多田 一臣 <国文学>

市川 裕 <宗教学>

池澤 優 <宗教学>

(第四部会 : 生命活動の発現としての人間観の検討)

横澤 一彦 <心理学・世話人>

立花 政夫 <心理学>

林 徹 <言語学>

赤林 朗 <医療倫理学>

シンポジウム「洋の東西の美術と思想にみられる死後の世界観」報告



国際シンポジウム フィレンツェにて開催

2003年3月21日に、イタリア・フィレンツェにおいて、わがCOEプログラム「死生学の構築」と、東京大学フィレンツェ教育研究センターとの共催で国際シンポジウム「洋の東西の美術と思想にみられる死後の世界観」が開かれました。このシンポジウムは、ウフィッツィ美術館内のマリアベキアーノ大広間で、七つの研究発表が日伊双方からなされ、研究の深化発展と研究者相互の交流に大きな成果をあげました。特に、「死生」というテーマが洋の東西に普遍的であることをあらためて確認し、またその表現の違いを通じて大きな課題が与えられたことは、非常に印象深いものでした。

本シンポジウムの 発表者・発表題目・内容梗概 学会の様子は、死生学ホーム・ページ (<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>) から見られます。

また発表内容は、逐次、本プログラムの研究雑誌『死生学研究』に掲載されます。(イタリア語版学会報告書も刊行する予定です。)

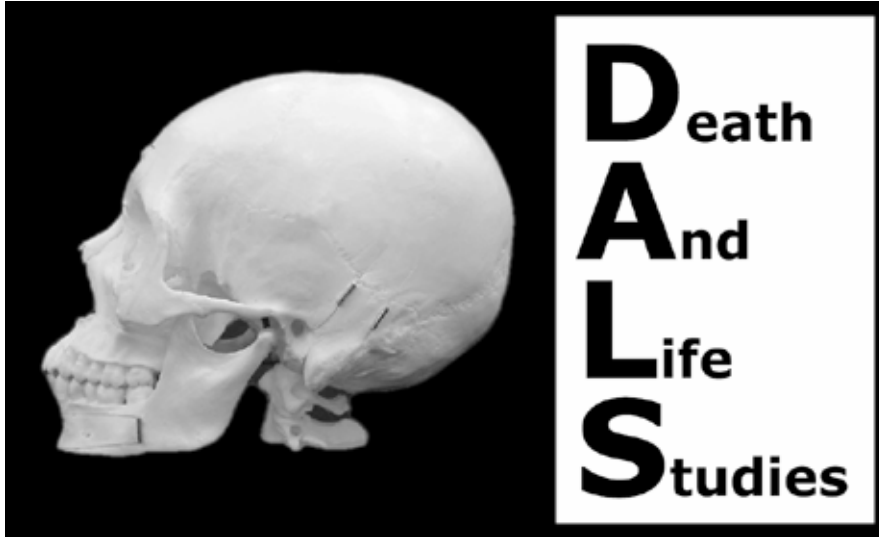


シンポジウムは、冒頭において、本プログラム拠点リーダー島菌進（宗教学）の挨拶ではじまりました。歴史あるフィレンツェの街での開催を祝し、シンポジウム関係者に感謝の意が伝えられました。また死生学研究の現代的意義について説明しました。

会場は、17世紀トスカナ大公国時代の貴重な写本・版本文庫を収めた図書室です。さすがにフィレンツェの長い歴史を感じさせるウフィッツィ美術館の一室だけあって、荘重な雰囲気には満ちています。本シンポジウムのために、特別に会場設営されました。



午前中の討論の様子。活発な質疑が行われ、イタリア人研究者の間で、日本文化に対する真剣な興味の高まりが感じられました。なかには、「清水寺」の寺名と、ヨーロッパにおける「命の水」伝説との内容的相違についての質問が出されました。



「DAL S ニューズレター」

第 2 号

平成 1 5 年 6 月 1 日発行

東京大学大学院人文社会系研究科

2 1 世紀 C O E “ 生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築 ”

責任者 島 蘭 進

TEL & FAX 03-5841-3736